

「認識の相対性」再考

白井 仁人 (Hisato Shirai)

一関工業高等専門学校

本研究の目標は、渡辺慧 (1986) が提案した「認識の相対性」の考え方を量子、時間、意識 (心)、確率などの哲学的な問題に適用することである。この研究には動機が二つある。第一は、量子力学の解釈に関係する。量子力学の解釈について研究していると、自由意志の問題に出会う。自由意志を認めるかどうかで解釈に大きな差が出るのだ。私は自由意思を認めない立場であり、これまで「物理法則と自由意志は説明の次元が違う」と答えてきたが、最近、それが「認識の相対性」に関係すると気付いた。そこで、その考え方について再検討することとした。第二は、最近、物理学者と哲学者が同一の概念 (時間など) について議論する機会が増えたことにある。そうした議論は有意義だが、話が噛み合わないことが多い。その噛み合わなさの原因は、両者の前提が異なることにあると推測するが、これも「認識の相対性」に関係するので、この点も議論したい。

1. 認識の相対性

「認識の相対性」とは、渡辺慧 (1986) が提案した次の考え方である。

- (1) 対象に対する視点が2つ以上ある。1つの視点で説明すれば首尾一貫している。
- (2) 同時に複数の視点を入れて説明すると矛盾が生じる。
- (3) 1つの視点だけが正しいのではない。1つの視点だけで考えると、対象の理論化が十分総合的でなくなる。よって、いろいろな視点を許さねばならない。

渡辺 (1986) は「認識の相対性」が当てはまる例を2つ挙げた。一つは量子力学の相補性であり、もう一つは心身問題である。渡辺は次のように述べている。「・・・心だけあって身がないという状態です。またその逆に物だけあって精神のない状態・・・その2つの立場の両方を認めることができます。そういう立場が私の言っている心身問題の解決法です。」(「知ること」と、p.188)

筆者が思いつく例は古典力学の慣性力である。

視点 A (慣性系) 運動方程式: 質量×加速度=力

視点 B (加速度系) 運動方程式: 質量×加速度=力+慣性力

慣性力は「見かけの力」と呼ばれることもあり、視点の取り方によって有無が変わる。同時に2つの視点で考えると矛盾が生じるが、それぞれの視点では首尾一貫している。一つの視点だけが正しいのではない。いろいろな視点を許さねばならない。

自由意志や時の流れ、心 (意識) などの概念も、慣性力と同様に、視点の違いによって有無が変わるものとして理解できないかというのが本研究の狙いである。

2. 諸概念への適用

諸概念に適用してみる。【視点 A】経験世界、【視点 B】物理世界、【X】メタ理解。

時間：【視点 A】 我々の経験に基づいて考えれば、時間には「流れ」や「今」がある。むしろ「今」しかないのが現在主義となる。**【視点 B】** 物理法則に基づいて考えれば、その中に「今」という特別な瞬間はなく、「時間の流れ」（今の移動）もない。過去・現在・未来は同等であり、時間は第4の座標軸にすぎない。よって、4次元ブロック宇宙観となる。**【視点 X】** A, B 両方認めるが、同時に成り立つとは考えない（メタ理解）。

心（意識）：【視点 A】 経験に基づけば明らかに「私の心」はある（経験論や観念論）。（私の心だけ認めるときは独我論。）**【視点 B】** 実験や物理法則に基づけば意識（心）は幻想であり、物理世界に心は存在しない（唯物論）。**【視点 X】** A と B を行き来し、自分の心と体の関係を他者の心と体の関係に当てはめたときに初めて「他者の心」が現れる。視点 A では他者がすべて哲学的ゾンビであり、B では自分を含め全員が哲学的ゾンビである。視点 X でだけ皆、ゾンビでなくなる。

自由意志：【視点 A】 経験世界に基づけば明らかに自由意思は存在する。未来にはいくつかの可能性があり、私は自由意思でその一つを選択している。**【視点 B】** 実験や物理法則に基づけば自由意思は存在しない。私が未来を自分で選んだ気になっているにすぎず、それも脳内現象として説明できる。**【視点 X】** 自由意志は経験世界に存在するが、物理世界には存在しない。一方だけが正しいのではなく、どちらも可能な見方であり、どちらも受け入れなければならない。

自由意志について 経験世界には自由意思があり、物理世界には自由意思がないと考えることは、矛盾でも二元論でもなく、視点の違いである。視点が変わると言葉の意味も変わる。経験世界での「自由」は、自分で選択していると感じることであり、物理世界での「自由」は、体の動きや脳内計算が脳の制御下にあることである。

前研究（量子力学の解釈）で私が述べた「説明の次元が違う」の意味も、まさにこの「視点が違う」という意味である。

3. 視点の混合のパラドクス

メタな視点から理解すること（メタ理解）は非常に重要である。それは2つの視点の混合ではない。視点を混合するとパラドクスが生じる。（例1）円運動する→遠心力がはたらく→無重力になる→向心力がない→円運動しない。（例2）心がある→心で物理世界を感知できる→物理世界がある→物理世界に心はない→心はない。（例3）今がある→今は 16:30→今は 16:31→今は 16:32→絶対的な今はない→今はない。

4. 議論

- 「認識の相対性」の考え方は、哲学の問題を根本的に解決するわけではないかもしれないが、視点の違いを明確にするので、混合によるパラドクスを排除できる。
- **【話の噛み合わなさの原因】** 物理学は物理世界 B の問題を物理世界 B の言葉で説明するので、理論が物理世界 B の内側で閉じることができる。しかし、哲学は問題が経験世界 A の側にあり、それなのに議論は他者との共通概念（B や X）で行わざるをえないため、経験世界 A の内側で閉じられない。哲学には必然的にこの困難が伴う。多くの哲学者は、無理やり共通言語 X を用いて A の問題を説明するが、物理学者の視点は B のまま。これが物理学者と哲学者の議論の噛み合わなさの原因ではないだろうか。